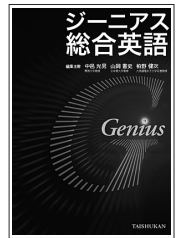


『ジーニアス総合英語』は こうして生まれた

編集部



この秋、『ジーニアス総合英語』が満を持して登場します。既に見本本をご覧になった先生もいらっしゃると思いますが、いよいよ正式に刊行され、書店にも並びます。

■文法版「ジーニアス」

英語学習の二本柱は「語彙」と「文法」でしょう。語彙の面では『ジーニアス英和辞典』が学習者を支えてきましたが、小社は学習用の文法書は出していませんでした。これからは『ジーニアス総合英語』が文法版「ジーニアス」として学習者を支えられることをうれしく思います。

実のところ、『ジーニアス英和辞典』にも文法の情報は多く載っています。例えば、助動詞の can には約2.5ページ、will には約2ページ、may や must にはそれぞれ約1.5ページの紙幅が割かれており、いずれも相当の情報量です。また、be を引けば、進行形や受動態、be to などに関する詳しい情報を得ることができます。

しかし、単語をアルファベット順に並べる辞書では、文法事項について体系だった説明をすることは困難ですし、動名詞・分詞や基本時制など、扱える見出しが存在しない文法事項がいくつかあります。文法のことは辞書でなく文法書で調べるという学習者も多いでしょう。

『ジーニアス英和辞典』の有益な文法・語法情報を文法書という形で学習者に示す必要があるし、示したい——これが『ジーニアス総合英語』を刊行することになった大きな理由の一つです。

■編集委員と形式上の方針

総合英語の分野に新規参入するにあたっては、「とにかくよい本を作る。そのために『ジーニアス英和辞典』のエッセンスを注ぎ込む」と考えました。主幹を含む編集委員チームには、『ジーニアス英和辞典』から中邑光男先生、柏野健次先生、富永幸先生、英語表現の教科書 *Departure* から山岡憲史先生、加藤治之先生、吉田健三先生に入っていました。さらに、主に英文校閲担当の北野マグダ・レーナ先生、駿台・河合塾・東進の講師を経て現在は代々木ゼミナールの福崎伍郎先生などもメンバーです。ちなみに、福崎先生は、そのキャリアを活かし、『ジーニアス総合英語』の講義動画（購入特典）の講師を務めてくださいます。

『ジーニアス英和辞典』のエッセンスを注ぎ込むと言っても、もちろん、辞書の記述をそのまま移すことはできません。解説の内容以外については、次の方針を定めました。

- ・わかりやすい文章にする：辞書は紙幅の都合により非常に簡潔な記述が求められます。総合英語は主に高校1年生が読むことから、具体的に理解しやすい文章にすることを心がけました。
- ・読みやすい紙面にする：囲みや色を多用するとむしろ読みにくいと考え、紙面はシンプルにしました。また、検索の便を考慮し、小見出し付きの2段組としました。
- ・使いやすい目次立てにする：現場の先生方の使いやすさを考え、目次立てでは独自性を出さず、オーソドックスなものにしました。

■発信のための情報に富む中身

さて、肝心の中身ですが、コミュニケーションのための英文法、4技能のベースとなる英文法という観点から、高校生にとって必要十分な情報が盛り込まれています。その情報は、発信用辞書である『ジーニアス英和辞典』に基づいていて、正確です。例を2つ挙げてみましょう。

(1) Will you ...? と Can you ...?

Will you ...? も Can you ...? も「依頼」を表すという説明はどの本にもあります。受信にはそれだけで事足りるでしょう。しかし、発信を想定するなら、2つの表現の違いを押さえていないと、どちらを使えばよいかわからず困るはずです。『ジーニアス総合英語』は Would you ...?, Could you ...? も含めて違いを記しています (p.131)。

中邑先生が「ジュース1杯」がカップ1杯なら a glass of juice でなく a cup of juice と言えるという注記をつけたと本誌 p.18 に書いておられますが、これにしても発信を想定していることの一例です。そういう記述が『ジーニアス総合英語』にはたくさん載っています。

(2) may, might, could と can

may, might, could は現在や未来に関する「具体的な可能性」を表します。しかし、can は肯定文で「具体的な可能性」を表すことはできません（疑問文・否定文では可能）。M. Swan の *Practical English Usage* の第4版 (2016) に次のような説明があります（第3版にもありました）。

chances: may / might / could

We often use *may*, *might* and *could* to talk about the chance (possibility) that something will happen, or is happening.

Can is not normally used to talk about the chance that something will happen or is happening.

『ジーニアス総合英語』は、柏野先生の記事（本誌 pp.22-23）にもある通り、正しい情報と適切な例文を載せています（pp.116-117, pp.120-

121）。これは細かい情報のように思えるかもしれませんが、発信を想定すると決してそうではないとおわかりいただけるでしょう。

■『ジーニアス総合英語』の完成まで

このような類書にあまりない説明を入れるにあたっては、多くの議論を経ました。辞書編集でもそうですが、英語の使用実態をそのまま示せばよいというわけでなく、規範的な立場に立ったり日本の英語教育の事情を勘案したりする必要があります。そのあたりのバランスには非常に気を遣いました。編集委員の半分は、高校現場での指導経験がある先生方です。一歩進んだ説明は、主にコラムや注記で扱いました。

類書と同じような説明の一つ一つについても、従来通りでよいかという吟味をしたため、『ジーニアス総合英語』にかかった時間や手間は並大抵ではありません。編集会議を何回も開き、原稿は何度も書き換えていただきました。校正刷り（ゲラ）の形になってからも修正を重ねました。間違いを正しくするためというよりむしろ、より適切でわかりやすい説明にするためです。

編集期間の後半の数か月間は、編集部員が編集主幹の一人と電話で質問や確認のやり取りをするのが文字通り日課となりました。別の編集委員には、やはり質問・確認のための長文メールを、頻繁に送り、回答をしていただきました。

そのようにしてようやく完成した『ジーニアス総合英語』です。ぜひとも手に取ってご覧いただければと思います。



福崎伍郎先生（『ジーニアス総合英語』編集委員／代々木ゼミナール講師）による講義動画の1コマ